台大日本語文研究第 16 期
2008 年 12 月，頁 139-168
2008-09-08 收稿，2008-12-15 通過刊登

日語教科書會話範例裡的「中途終了型發話」

陳文敏*

摘要

日語會話裡常可聽到「中途終了型發話」。但依先行研究結果指出，日語學習者有時因無法善用「中途終了型發話」而產生失禮的狀況。因此本稿以日語學習者在學習日語時最依靠的教課書爲資料，針對會話範例裡的「中途終了型發話」做了調查。本稿從種類別（綜合教科書、聽解教科書、會話教科書）和程度別（初級、中高級）兩個觀點做了分析考察，獲得下列 3 點結果。

Ⅰ.全體平均出現率爲 40.1%。

Ⅱ.種類別上發現有其差異，但依教科書其出現比例差異更大。

Ⅲ.程度別的出現傾向分述爲下列 3 點。①中高級教科書裡出現地較初級教科書爲頻繁。②初級教科書和中高級教科書裡表現形式的出現比例差異極大。③從會話基本文體角度來看的話，和上述②一樣，初級教科書和中高級教科書裡亦觀察到不同的出現傾向。

以上述等結果爲基礎，提議在指導「中途終了型發話」時應留意下列 3 點。(A)不致失禮的音調。(B)與會話基本文體的關聯使用差異。(C)因使用文脈而產生的功能差異。

關鍵詞：日語教科書、會話範例、「中途終了型發話」、教科書種類、教科書的程度

* 靜宜大學日本語文學系助理教授

“Unfinished Utterances” in Model Conversations of Japanese Language Textbooks

CHEN, Wen-Miin*

Abstract

"Unfinished utterances" are often used in Japanese conversation. However, it is reported that Japanese learners cannot master "unfinished utterances" well and may inadvertently become impolite as a result. A lot of foreign language learners are studying the target language through a textbook. This study investigates how "unfinished utterances" are used in the model conversations of the Japanese language textbooks.

These "unfinished utterances" were analyzed according to the kind of textbooks (integrated textbook, listening textbook, and conversation textbook) and the level of textbooks (elementary and intermediate-advanced). As a result, various different tendencies were found about the appearance percentage of the "unfinished utterances". Some Japanese language instructions were pointed out based on such results etc.

Keywords: Japanese language textbooks, model conversations, “unfinished utterances”, the kind of textbooks, the level of textbooks

* Assistant Professor of Department of Japanese Language and Literature,Providence University

日本語教科書のモデル会話における「中途終了型発話」

陳文敏*

要旨

日本語の会話では「中途終了型発話」をよく耳にする。しかし、日本語学習者は「中途終了型発話」をうまく使いこなせず、失礼になることがあると先行研究で報告されている。そこで、本稿では日本語学習者が学習の際、最も依存している教科書を対象に、モデル会話における「中途終了型発話」について調査した。教科書の種類別（総合教科書、聴解教科書、会話教科書）とレベル別（初級、中上級）に分析した結果、以下の 3 点が分かった。

Ⅰ.全体的な平均出現率は 40.1%であった。

Ⅱ.種類別でも差が見られたものの、むしろ教科書によって出現割合が大きく異なる。

Ⅲ.レベル別の出現傾向に関しては、次の 3 点が言える。①初級教科書より中上級教科書のほうに多く観察された。②初級教科書と中上級教科書で、表現形式ごとの出現割合が大きく異なっている。③「会話の基本レベル」ごとに調べた場合も、上記の②と同様に、初級教科書と中上級教科書で異なる傾向が見られた。

なお、上記の結果等を基に、指導上の注意点として、(A)失礼にならないような音調、(B)「会話の基本レベル」による使用傾向、(C)使用コンテクストによる機能の違い、の 3 点を指摘した。

キーワード：日本語教科書、モデル会話、「中途終了型発話」、
教科書の種類、教科書のレベル

* 静宜大学日本語学科助理教授

日本語教科書のモデル会話における「中途終了型発話」

陳文敏

一、はじめに

日本語における発話末のスピーチレベルは、一般的に「ダ体」と「デス・マス体」の 2 つであると考えられている[1]。一方、日本語母語話者の会話や教科書のモデル会話で、「ちょっと…」などのように「ダ体」と「デス・マス体」のどちらにも分類できないものをよく見聞きする。本稿では「ちょっと…」のような発話を「中途終了型発話」と呼ぶことにする。こうした「中途終了型発話」は日本語学習者がうまく使えず、会話の際、問題になるとの研究報告がある。例えば、生駒・志村（1993：47）では、アメリカ人日本語学習者は「断り」という発話行為を行う際、「中途終了型発話」をあまり使用しないこと、相手の地位の高さによって使い分けておらず、失礼になりかねないことを指摘している[2]。陳（2004a：27-29）では、台湾人上級日本語学習者は引用内容(第三者の発話あるいは自分の思考)を表出する時、「中途終了型発話」にしてもよいところを「ダ体発話」にしてしまい、結果的にスピーチレベルの操作ミスを起こしている、と報告している。このように、「中途終了型発話」を使いこなせないと、相手に失礼になり、スピーチレベルによる人間関係の調節で失敗してしまうことがあるのである。

日本語学習者が苦手にしている「中途終了型発話」は、現在、どのように教えられているのであろうか。それを明らかにするため、まず教科書分析から始めたい。教科書には様々な問題があると指摘されてはいるが、多くの学習者が最も依存しているリソースであり、

[1] スピーチレベルとは、発話の末尾にくる表現形式の丁寧さのことで、基本的に「ダ体」と「デス・マス体」の 2 つがある。この「ダ体」と「デス・マス体」が同じ話者によって混ぜて用いられた場合、その切り替えの箇所がスピーチレベル・シフトと呼ばれている。

[2] 二、(二) 節でも述べるように、生駒・志村（1993）では「中途終了文」という用語を使用している。

教師にとっても指導上不可欠な道具だからである。そこで、本稿では「中途終了型発話」について教科書のモデル会話（以下、モデル会話）における使用状況を調査する[3]。具体的な研究課題は、次の 4 点である。

A.モデル会話から新たに見つかった表現形式の有無

B.各教科書における「中途終了型発話」の出現割合

C.表現形式で見る「中途終了型発話」の出現傾向

D.教科書における「中途終了型発話」の説明・練習

二、先行研究

本章では、教科書分析と「中途終了型発話」の二節に分けて、それぞれの先行研究について見てみる。

二、（一）、教科書分析の先行研究

紙幅の関係で一々挙げることができないが、例えば、カノックワン（1995）の断りの研究、清（2003）の「つまらないものですが」という表現の研究、谷口（2004）のスピーチレベル・シフトの研究のように、基本的に“教科書”と“現実の使用または意識”との相違を明らかにしたものが多い。こうした研究で共通して言及されているのは、「教科書にはある表現やその機能、または文法項目に関する練習や説明が極めて少ない」ことである。言い換えれば、現場の教師に任せて説明させているというのが実状である。

二、（二）、「中途終了型発話」の先行研究

「中途終了型発話」という用語は、管見の限りでは最初は生駒・志村（1993）で使用され、「中途終了文」と呼ばれている。「中途終了型発話」のスピーチレベルに関しては、最初に規定したのが宇佐

[3] 調査対象をモデル会話に限定する理由は五、（三）節でも述べるように、「中途終了型発話」の使用状況をより明白に把握するため、話者の「会話の基本レベル」別に分析考察を行うことが必要で、これを実行するには、モデル会話に限定するのが適切だと思われるからである。

美（1995）で、「－レベル」（筆者注：「ダ体発話」）と捉えられている[4]。日本語母語話者が使っている「中途終了型発話」の表現形式については、陳（2000・2004b）と杉山（2001）の研究が挙げられる。今のところでは、「中途終了型発話」の表現形式について比較的詳細に報告されているのが陳（2004b）であるため、ここでは陳（2004b）の結果を紹介する。まず、表現形式として次の 3 種類に大きく分けられる。（括弧に書いてある具体的な表現は陳（2004b）のデータに現れたもの。）[5]

（1）複文の主節が省略されている発話：

①テ形表現（動詞、判定詞、イ形容詞、助動詞、**ナ形容詞**）[6]

②条件形表現（と、ば、**たら、なきゃ**）

③接続助詞表現（ので、んで、のに、ながら）[7]

（2）述部が省略されている発話：

④引用表現（と、って）

⑤トピック提示表現（は、って、も）

⑥例示表現（とか、たり）

⑦副詞表現（レパートリーが多く、特定しがたい）

⑧名詞修飾表現（～と／っていう、（名詞）の、イ形容詞、助動詞）

⑨名詞（句）＋格助詞表現（が、で、**と**、に、**へ**、**より**、を）、

⑩その他（上記のどれにもあてはまらないもの）

---

[4] 宇佐美（2001）では、「中途終了型発話」をスピーチレベルが明示されていない「マーカーなし」と捉えなおしている。

[5] 各表現形式の括弧の中に書いてある太字の表現は実際陳（2004）のデータでは台湾人日本語学習者にしか見られない。しかし、それは単に使用コンテクストではないため、日本語母語話者が用いなかった可能性もある。本稿では、比較検証するためにも、あえてそのような表現も入れておくことにする。

[6] 品詞（動詞、名詞、イ形容詞、ナ形容詞、判定詞、助動詞）の認定に関しては、益岡・田窪（1992）を参照した。

[7] 陳（2004b）では、「ので、んで、のに、ながら」の 4 つの接続助詞で終わった発話を「中途終了型発話」と見なしている。一方、接続助詞はほかに「が／から／けど（けれども・けれど・けども）／し」もあるが、これらを接続助詞の終助詞的な使い方と捉えている。その理由は、南（1974）で「が／から／けど（けれども・けれど・けども）／し」は従属度（C 類）がほかのもの（B 類）より低いとされているためである。本稿もこれに従う。

（3）形式的には「ダ体」だが、音声的に「ダ体」と認められない発話[8]

また、生起要因としては、(1) 同じ情報の繰り返しの回避、(2) 直接的な質問の回避、(3) 明言の回避、(4) スピーチレベルぼかし、の 4 つが挙げられている。

上述した「中途終了型発話」の表現形式を本稿の分析の土台とする。ただし、これは「中途終了型発話」の表現形式を網羅的にまとめたものとは言いかねる。よって、教科書のモデル会話を分析しながら、追加できるものが見つかったならば、補足していきたい。しかし、本稿では生起要因についての検討は行わない。教科書のモデル会話では、会話参加者の人間関係が明示されていないものもあるためである。

三、本稿における「中途終了型発話」の捉え方と認定

本稿は陳（2004b）に従って「中途終了型発話」の認定を行う。その認定の手順と基準は以下のとおりである。

まず、当該発話において情報伝達が終了していると判断された発話、つまり言い終わっている発話のみを分析対象とする。次に、言い終わっている発話を、言い切っている発話と言い切っていない発話に分ける。言い切っている発話は文法的に完結しているもので、「ダ体発話」か「デス・マス体発話」になる。言い切っていない発話は本稿の研究対象である「中途終了型発話」である。これはさらに文法的に言い切っていないもの（例えば、「あしたはちょっと…」）

[8] 例えば、次の例 A にある→付きの発話は「(3)形式的には「ダ体」だが、音声的に「ダ体」と認められない発話」で「中途終了型発話」に当たる。
例 A（『現代日本語コース 中級 I 』第 9 課より）
先生：学会に間に合うようにコピーしといてくれないかな。
ルイン：はい。
→ 何部ぐらい…。
先生：うーん、１００部もあればいいと思うけど。
上記の→付きの発話は最後に「…」と表記されることから、末尾が平板のイントネーションを伴い、伸ばしてゆっくり話されていると思われる。このような音声的特徴から、この発話は音声的に言い切っていないものと認定した。なお、多くの場合、相手に質問する時に見られる。

と、音声的に言い切っていないもの（例えば、注 8 の例 A にある→付きの発話「何部ぐらい･･･」）に分けられる。

本稿は教科書におけるモデル会話を使用して分析するものである。教科書に出てくる発話は、発話末にすべて「。」が付いており、基本的に全部言い終わっている発話と考えてよいであろう。しかし、一見「中途終了型発話」のように見えるものの、実際「中途終了型発話」ではないものがある。例えば、例 1～例 3 で示しているが、途中にあいづちが入っている場合（例 1 の 2 があいづち）、命令や依頼の「て形」（例 2）、倒置（例 3）、の 3 つの場合である。本稿では、この 3 つを分析対象から除外する。

例 1（『現代日本語コース 中級 I 』第 9 課より）

ルイン：そうですか。何かお手伝いできることが
ありましたら……。
先生：そうだね。
→1 じゃ、わるいけど、レジメをね。
2 ルイン：ええ。
→3 先生：学会に間に合うようにコピーしといてくれないかな。

例 2（『場面設定學日語』第 1 課より）

メラニー:これは先週ピクニックに行ったときとった
しゃしんです。
→ ゆき：どれどれ見せて。

例 3（『現代日本語コース 中級Ⅱ』第 13 課より）

助手：そういうことは報告に来なくちゃ。
→ ペレス：あ、すみません、気がつかなくて。

四、使用教科書と電子ファイル化するモデル会話の詳細

本稿で使用する教科書は表 1 の通りで、18 冊ある[9]。この 18 冊を選んだ理由は、主に台湾または日本でよく使われているという点にある。これらの教科書におけるモデル会話を分析対象とし、表 1 の一番右側にその詳細を示している。

表 1　分析用教科書リストとモデル会話の詳細

本のタイトル	編著者	出版年	出版社	実際電子ファイル化するモデル会話の詳細
『げんきⅠ』	坂野永理・大野裕・坂根庸子・品川恭子	1999	The Japan Times	各課の「かいわ Dialogue」というところ
『げんきⅡ』	坂野永理・大野裕・坂根庸子・品川恭子・渡嘉敷恭子	1999	The Japan Times	
『現代日本語　綜合講座』	水谷信子	2000	大新書局	各課の「会話」というところ
『現代日本語コース 中級Ⅰ』	名古屋大学日本語教育研究グループ	1988	名古屋大学出版会	各課の「会話」というところ
『現代日本語コース 中級Ⅱ』	名古屋大学日本語教育研究グループ	1988	名古屋大学出版会	
『新實用日本語 會話Ⅰ』	呂惠莉・康妙齡	2004	銘薪股份有限公司	各課の「応用会話」というところ
『新實用日本語 會話Ⅱ』	呂惠莉・康妙齡	2005	銘薪股份有限公司	
『大家的日本語 初級Ⅰ（みんなの日本語）』	スリーエーネットワーク	1999	大新書局	各課の「会話」というところ
『大家的日本語 初級Ⅱ（みんなの日本語）』	スリーエーネットワーク	1999	大新書局	
『大家的日本語 進階Ⅰ（みんなの日本語）』	スリーエーネットワーク	1999	大新書局	
『大家的日本語 進階Ⅱ（みんなの日本語）』	スリーエーネットワーク	1999	大新書局	
『日本語生中継 初中級編Ⅰ』	ボイクマン総子・小室リー郁子・宮谷敦美	2006	くろしお出版	各課の「聞き取り練習」というところ
『日本語生中継 中～上級編』	椙本総子・宮谷敦美	2004	くろしお出版	各課の「聞き取り練習Ⅰ」というところ
『日本四季入門（季節で学ぶ日本語）』	石塚京子・市瀬俊介・寺田和子・堀越和男・増井世紀子・村澤慶昭	2001	大新書局	各課の「会話」というところ
『場面設定學日語（モジュールで学ぶよくわかる日本語〈1〉）』	コーベニ・澤子・高屋敷真人・本間直子	1995	大新書局	各課の「聴力練習1」と「聴力練習2」というところ
『毎日聴力50 初級Ⅰ（毎日の聞きとり50日ー初級日本語聴解練習（上））』	太田淑子・柴田正子・牧野恵子・三井昭子・宮城幸枝	2000	大新書局	各課の最後から二番目の練習箇所（右の絵があるところ ）
『毎日聴力50 初級Ⅱ（毎日の聞きとり50日ー初級日本語聴解練習（下））』	太田淑子・柴田正子・牧野恵子・三井昭子・宮城幸枝	2000	大新書局	
『搶救日語-聽解篇（初級から中級への橋渡しシリーズ③聴解が弱いあなたへ）』	日本語教育研究所	2004	大新書局	各課の「Ⅱ」というところ

[9] 教科書は五十音順に基づいて配列している。元々日本で出版されているが、台湾の出版社が代理出版しているものには括弧付きで日本語名を示しておく。ただし、表 1 以降は見やすさのため、括弧付きの日本語名を省略する。

モデル会話を処理するには、CHILDES（宮田 2004）という言語データベース処理システムを使用している[10]。そして、電子ファイル化は JCHAT（Japanese CHAT （ Codes for the Human Analysis of Transcripts ））というフォーマットを参考にした[11]。

五、分析結果

本章では、第一章で述べた 4 つの研究課題、A.モデル会話から新たに見つかった表現形式の有無、B.各教科書における「中途終了型発話」の出現割合、C.表現形式で見る「中途終了型発話」の出現傾向、D.教科書における「中途終了型発話」の説明・練習について分析考察した結果を報告する。

五、（一）、追加表現形式

本稿が資料としたモデル会話から新たに見つかった「中途終了型発話」の表現形式は以下の通りである。

（1）複文の主節が省略されている発話：

①テ形表現（ても：例 4）

②条件形表現（なくちゃ：例 5）

③接続助詞表現（くせに：例 6）

（2）述部が省略されている発話：

⑨名詞（句）＋格助詞表現（にも：例 7）

（も：例 8）

[10] CHILDES は Child Language Data Exchange System の略である。詳しくは http://childes.psy.cmu.edu/、または http://www.cyber.sist.chukyo-u.ac.jp/JCHAT/index-j.html を参照されたい。

[11] ただし、次の 2 点で修正を施した。ｱ.基本的に話者一人一回の発話につき、話者記号を 1 つで表し、発話ごとに改行もしない。ただし、注目してもらいたい発話がある場合のみ、改行する（例 1 の→1 等参照）。ｲ.すべての読点を「、」に、句点を「。」に統一した。

例 4（『日本四季入門』第 9 課より）[12]

女：あなたならすぐ終わるわよ。がんばって！

→ 男：そんなこと言われてもな……。
今言ったこと、全部今日中にするつもりなの？

例 5（『げんきⅡ』第 23 課より）

たけし：そんな悲しそうな顔しないで。

メアリー：わかってる。

→ じゃあ、そろそろ行かなくちゃ。

たけし：メアリーが卒業して日本に戻ってくるまで、待っているから。

例 6（『現代日本語コース 中級Ⅱ』第 12 課より）

高橋（妻）：ねえ。でも試験中でね、勉強に集中できないらしいのよ。

高橋（夫）：ふうん。勝手なこと言うなあ。

→ きのうマージャンしてたくせに。

例 7（『日本語生中継 中～上級編』第 6 課より）

乗客：２、３時間後。こっちはもう 1 時間も待たされてんだぞ。いったいどうなってるんだ。

駅員：申し訳ございません。

→ トンネルで何かあったらしくて、でもまだ詳しい事情がこちらにも…。

乗客：こういうときは、ちゃんと説明しいてもらわないと困るんだよ。

[12] 例 4 における「中途終了型発話」（そんなこと言われてもな……。）は、最後に終助詞の「な」が来ている。このような場合、終助詞の前の形式で「中途終了型発話」の表現を決める。

例 8（『日本語生中継 初中級編 1』第 4 課より）

高木：それが、さんざんだったんですよ。今夏休みでしょ。渋滞がひどくって、行くのに 5 時間もかかっちゃって。

→ 佐々木：5 時間も？

高木：そうなんですよ。

なお、「⑨名詞（句）＋格助詞表現：も」は、「⑤トピック提示表現：も」と同じように見えるが、例 8 のようにその直前に数量詞が来るものであり、トピック提示表現にならないので、区別しておく。以下では、これらの表現形式も加えて分析を行うことにする。

五、（二）、各教科書における「中途終了型発話」の出現割合

本稿が資料とした教科書には、計 339 個のモデル会話が見られた。本稿で使用している 18 冊の教科書を、「総合教科書」（9 冊）、「聴解教科書」（5 冊）、「会話教科書」（4 冊）の 3 種類に分類した上で、教科書ごとの会話数、及び「中途終了型発話」の出現した会話数・割合を表 2 に整理した。なお、「中途終了型発話」の出現割合の高い教科書から並べてある。

この 339 個のモデル会話において「中途終了型発話」が出現している会話は 136 個あり、「中途終了型発話」の平均出現率は 40.1%である。種類別の平均で見ると、聴解教科書の 48.0%が最も高く、次は総合教科書の 35.3%で、一番低かった会話教科書も 3 割ある。ところが、一冊ごとに見ていくと、出現割合が一番高かったもの（『現代日本語コース 中級Ⅱ』73.3%）、及び最も低かったもの（『大家的日本語 進階Ⅰ』7.7%）はいずれも総合教科書であり、「中途終了型発話」の出現割合は教科書によって差が大きいことが分かった。これは教科書のレベルの差によるものであろう[13]。このことは、表 2

[13] なお、教科書の編著者の編集意図などの反映という可能性も否定はできない。しかし、この点は本稿の検討する課題ではないので、これ以上触れないことにする。

に示しているように、上位に位置付けているのは、『大家的日本語』というシリーズを除いていずれも中上級教科書であることから読み取れよう[14]。

表 2　会話数及び「中途終了型発話」の出現割合

教科書名		会話数	「中途終了型発話」出現会話数	「中途終了型発話」出現割合
総合教科書	『現代日本語コース 中級Ⅱ』	15	11	73.3%
	『現代日本語コース 中級Ⅰ』	18	9	50.0%
	『現代日本語　綜合講座』	30	13	43.3%
	『げんきⅡ』	11	4	36.4%
	『げんきⅠ』	12	3	25.0%
	『大家的日本語 初級Ⅱ』	12	3	25.0%
	『大家的日本語 進階Ⅱ』	12	2	16.7%
	『大家的日本語 初級Ⅰ』	13	2	15.4%
	『大家的日本語 進階Ⅰ』	13	1	7.7%
	小計	136	48	35.3%
聴解教科書	『日本語生中継 中～上級編』	42	29	69.0%
	『日本語生中継 初中級編1』	39	24	61.5%
	『搶救日語–聴解篇』	22	7	31.8%
	『毎日聴力50 初級Ⅱ』	23	6	26.1%
	『毎日聴力50 初級Ⅰ』	24	6	25.0%
	小計	150	72	48.0%
会話教科書	『日本四季入門』	12	8	66.7%
	『場面設定學日語』	11	4	36.4%
	『新實用日本語 會話Ⅱ』	15	2	13.3%
	『新實用日本語 會話Ⅰ』	15	2	13.3%
	小計	53	16	30.2%
総計		339	136	40.1%

注：本稿では、割合は小数第二位を四捨五入している。

「中途終了型発話」の出現割合は教科書によって差が大きいものの、学習者も教師も「中途終了型発話」に触れる機会が決して少ないとは言えない。というのは、「会話」や「聴解」などの授業も同時に平行して行われるからである。よって、教師による「中途終了型発話」の指導の工夫が学習者の効率的な学習に繋がると思われる。

五、(三)、表現形式で見る「中途終了型発話」の出現傾向

本節では、まずは全体的、それから教科書のレベル別の初級、中上級に分けて、表現形式で「中途終了型発話」の出現傾向を見ることにする。なお、以下では「中途終了型発話」の出現数を使用話者

[14] 教科書のレベル分類基準は五、(三)、2節参照。

の「会話の基本レベル」別に集計する。「会話の基本レベル」は、当該会話において「中途終了型発話」の使用話者が相対的に多く用いているスピーチレベル（注 1 参照）は、「ダ体発話」（以下、「ダ体ベース」）か、「デス・マス体発話」（以下、「デス・マス体ベース」）かによって判断する。モデル会話では様々な場面・人間関係が設定されているため、話者の「会話の基本レベル」別に見たほうが、「中途終了型発話」の使用状況がより明白に把握できると思われるからである。

例えば、例 9 では、「女」の発話は全部 8 つ見られる。そのうち、「中途終了型発話」が 3 つ（→付の 5、6、7）、ほかの 5 つはすべて「デス･マス体発話」である。「デス･マス体発話」が相対的に多く用いられているため、「女」の「会話の基本レベル」は「デス･マス体ベース」となっていると見なす。

例 9（『搶救日語聽解篇』第 28 課より）

1 女：先輩！今週の日曜日、私とデートしてください。
　男：デート？ううん、まいったな…。
2 女：映画のチケットが二枚あるんです。
3　　一緒に行ってくれませんか。
　男：映画か。
4 女：映画、嫌いですか。
→ 5　　じゃ、音楽は？
　男：クラシックは趣味じゃないね。
→ 6 女：ロックは？
　男：うん、いいね。
→ 7 女：私も！
8　　じゃ、一緒に CD 買いに行きません？
　男：ごめん、また今度さそってよ。

五、（三）、１、全体的な傾向

上記のように「中途終了型発話」が用いられたモデル会話は 136 個ある。その 136 個の会話を調べたところ、表 3 に示すように、計 261 個の「中途終了型発話」が観察された[15]。

表 3 から、まず、「会話の基本レベル」で見ると「デス・マス体ベース」のほうで現れた「中途終了型発話」が「ダ体ベース」のほうより 8%多いことが読み取れる。

次に、いくつかの表現（「①テ形表現：助動詞・ナ形容詞」、「③接続助詞表現：ながら」、「⑧名詞修飾表現：～と／っていう、イ形容詞、助動詞」、「⑨名詞（句）＋格助詞表現：と、より」）はモデル会話では観察されないことが分かる。それから、表現形式が特定しがたい⑦副詞表現と⑩その他を除くと、出現数が上位三位となる表現は「会話の基本レベル」別に見ると、次のようになる。

デス・マス体ベース：⑤トピック提示表現：は（28 個）
①テ形表現：動詞 1 （て形）（21 個）
③接続助詞表現：ので、んで（各 9 個）

ダ体ベース：①テ形表現：動詞 1 （て形）（19 個）
⑤トピック提示表現：は（13 個）
②条件形表現：たら（11 個）

上記の結果から、順番は違うが、「⑤トピック提示表現：は」と「①テ形表現：動詞 1 （て形）」は「会話の基本レベル」に関係なく、最もモデル会話で現れている「中途終了型発話」だと分かる。

これらの「中途終了型発話」の表現を個別に見てみると、いくつか興味深い現象が観察された。それらについては、次節以降の初級、中上級教科書別についての考察で述べることにする。

---

[15] 実際は次の例 B にある「お父さんは？」を含めて、262 個の「中途終了型発話」が観察された。しかし、例 B にある「お母さん」の発話がこの 3 つしかなく、「会話の基本レベル」が判断できないため、分析対象から除外した。なお、この例を除外しても分析の結果に影響を与えていない。

例 B（『場面設定學日語』第 4 課より）

お母さん：わたしはミックスサンドイッチとトマトスープにします。
飲み物はコーヒーがいいわ。
→ お父さんは？

表 3　表現形式で見る「中途終了型発話」の詳細

表現形式	出現数・割合				
	ダ体ベース		デス・マス体ベース		計
(1) 複文の主節が省略されている発話					
①テ形表現：動詞1（て形）	19	47.5%	21	52.5%	40
動詞2（でも）	3	100.0%	—	—	3
判定詞	3	50.0%	3	50.0%	6
イ形容詞	3	42.9%	4	57.1%	7
助動詞	—	—	—	—	—
ナ形容詞	—	—	—	—	—
②条件形表現：と	3	60.0%	2	40.0%	5
ば	1	100.0%	—	—	1
たら	11	91.7%	1	8.3%	12
なきゃ	3	75.0%	1	25.0%	4
なくちゃ	6	75.0%	2	25.0%	8
③接続助詞表現：ので	—	—	9	100.0%	9
んで	—	—	9	100.0%	9
のに	9	90.0%	1	10.0%	10
くせに	1	100.0%	—	—	1
ながら	—	—	—	—	—
(2) 述部が省略されている発話					
④引用表現：と	—	—	1	100.0%	1
って	5	100.0%	—	—	5
⑤トピック提示表現：は	13	31.7%	28	68.3%	41
って	3	100.0%	—	—	3
も	2	100.0%	—	—	2
⑥例示表現：とか	1	16.7%	5	83.3%	6
たり	3	100.0%	—	—	3
⑦副詞表現（レパートリーが多く、特定しがたい）	9	50.0%	9	50.0%	18
⑧名詞修飾表現：～と／っていう	—	—	—	—	—
（名詞）の	3	50.0%	3	50.0%	6
イ形容詞	—	—	—	—	—
助動詞	—	—	—	—	—
⑨名詞（句）＋格助詞表現：が	5	62.5%	3	37.5%	8
で	1	25.0%	3	75.0%	4
と	—	—	—	—	—
に	1	33.3%	2	66.7%	3
にも	—	—	1	100.0%	1
へ	—	—	3	100.0%	3
も	—	—	1	100.0%	1
より	—	—	—	—	—
を	1	50.0%	1	50.0%	2
⑩その他（上記のどれにもあてはまらないもの）	11	28.9%	27	71.1%	38
(3) 形式的には「ダ体」だが、音声的に「ダ体」と認められない発話	—	—	1	100.0%	1
合計	120	46.0%	141	54.0%	261

注：各欄の割合は表現形式ごとのものである。すなわち、当該表現形式が「ダ体ベース」または「デス・マス体ベース」でどれぐらい現れているかを示すものである。表4と表5も同様。

五、（三）、２、初級教科書における「中途終了型発話」

本稿で使用している教科書を、台湾で多用されている『大家的日本語 初級Ⅰ』と『大家的日本語 初級Ⅱ』により、初級と中上級に分類した。この 2 冊の教科書と同様の文法項目を収録している教科書は「初級」、それ以外は「中上級」とする。

上記の基準に沿って、初級教科書と分類したのは『げんきⅠ』、『げんきⅡ』、『新實用日本語 會話Ⅰ』、『新實用日本語 會話Ⅱ』、『大家

的日本語 初級Ⅰ』、『大家的日本語 初級Ⅱ』、『毎日聴力 50 初級Ⅰ』の 7 冊である。この 7 冊に観察された「中途終了型発話」の詳細は表 4 に示した通りである。

表 4 初級教科書における「中途終了型発話」

表現形式	出現数・割合				
	ダ体ベース		デス・マス体ベース		計
(1)複文の主節が省略されている発話					
①テ形表現：動詞 1（て形）	1	100.0%	—	—	1
②条件形表現：と	—	—	2	100.0%	2
なきゃ	—	—	1	100.0%	1
なくちゃ	1	100.0%	—	—	1
(2)述部が省略されている発話					
⑤トピック提示表現：は	—	—	14	100.0%	14
⑥例示表現：たり	2	100.0%	—	—	2
⑦副詞表現（レパートリーが多く、特定しがたい）	—	—	3	100.0%	3
⑨名詞（句）＋格助詞表現：が	—	—	2	100.0%	2
に	1	100.0%	—	—	1
へ	—	—	3	100.0%	3
を	—	—	1	100.0%	1
⑩その他（上記のどれにもあてはまらないもの）	1	25.0%	3	75.0%	4
計	6	17.1%	29	82.9%	35

まず、表 4 から初級教科書に現れた「中途終了型発話」は僅か 35 個、全体 261 個の 13.4%しかなく、観察された表現形式も少ない。そして、「デス・マス体ベース」で現れているものが 82.9%と圧倒的に多い[16]。さらに、殆どの表現（35 個中の 30 個で 85.7%）が「(2)述部が省略されている発話」に集中していることが読み取れる。

初級段階では、学習項目も限られており、「ダ体発話」や「ダ体ベース」の会話の出現も少なく、そして遅い[17]。こうしたことから、「中途終了型発話」は表現形式も出現数も少なく、殆ど「デス・マス体ベース」で現れているというのは当然の結果であろう。しかし、ここで最も多く観察された「⑤トピック提示表現：は」を見てみたい。

前節の全体的な傾向でも述べたように、「⑤トピック提示表現：は」は「デス・マス体ベース」で最も見られた「中途終了型発話」である（全部 28 個）。そこで、初級と分類した 7 冊の教科書を調べたところ、『新實用日本語 會話Ⅱ』を除き、すべての教科書に現れてい

16 「ダ体ベース」で現れたものはすべて『げんきⅡ』で見られた。

17 『大家的日本語』というシリーズでは、「初級Ⅱ」の第 20 課に「普通形」として挙がっており、会話も初めて「ダ体ベース」になっている。しかし、「ダ体ベース」の会話は、第 20 課きりである。

ることが明らかになった[18]。しかも、各シリーズの教科書の初出単元は、『毎日聴力 50 初級Ⅰ』では第 1 課、『げんきⅠ』では第 3 課、『新實用日本語 會話Ⅰ』では第 12 課、『大家的日本語 初級Ⅰ』では第 13 課となっていることから、「⑤トピック提示表現：は」を学習できる時期は決して遅いとは言えないことも窺える。このように、この「⑤トピック提示表現：は」という「中途終了型発話」は、初級からすでに重要学習表現となっていると考えてよいであろう。

ただし、この「⑤トピック提示表現：は」を発話する際に、音調に気を付けねばならないことは、陳（2004b）で指摘されている。なぜならば、「⑤トピック提示表現：は」を上昇調音調で発話した例は学習者にしか、つまり日本語母語話者には見られなかったと報告している。その理由は、上昇調音調で発話すると、失礼になってしまう恐れがあるからとしている（陳 2004b：164-165）。これに関しては、次の例 10 で確認しておきたい。

例 10（『新實用日本語 會話Ⅰ』第 12 課より）

陳：これは中学一年生の時の写真です。
C：陳さんは今とあまり変わりませんね。
A：隣の方はお父さんとお母さんですか。
陳：ええ、父と母です。
→ B：陳さん、ご兄弟は？
陳：五人です。兄が二人と姉と妹、そしてわたしです。

「⑤トピック提示表現：は」という表現形式は、例 10 のようにいつも「情報要求」という機能で使われる。特に「デス・マス体ベース」会話においては、上昇音調で発話すると、失礼ばかりか、相手を子ども扱いしているという印象を相手に与えかねない。従って、

[18] なお、中上級の教科書も「ダ体ベース」も合わせて調べたところ、同様に、『新實用日本語 會話Ⅱ』にのみ「⑤トピック提示表現：は」は 1 つも現れていない、という結果が得られた。

「中途終了型発話」は表現形式のみならず、失礼にならないような音調も初級段階で指導の工夫が必要な項目であると言えよう[19]。

五、(三)、3、中上級教科書における「中途終了型発話」

中上級教科書としたのは『現代日本語コース 中級Ⅰ』、『現代日本語コース 中級Ⅱ』、『現代日本語 綜合講座』、『大家的日本語 進階Ⅰ』、『大家的日本語 進階Ⅱ』、『日本語生中継 初中級編 1』、『日本語生中継 中～上級編』、『日本四季入門』、『場面設定學日語』、『毎日聴力 50 初級Ⅱ』、『搶救日語-聴解篇』の 11 冊である。表 5 では、この 11 冊で現れた「中途終了型発話」の詳細を示している。

表 5 を見てまず分かったのは、中上級教科書で観察された「中途終了型発話」は 226 個、全体 261 個の 86.6%と、9 割弱占めていることである。しかも、表現形式も多岐にわたり、「(1) 複文の主節が省略されている発話」(110 個) と、「(2) 述部が省略されている発話」(115 個) のどちらにも偏らずにほぼ半分ずつ現れている。さらに、前節の初級教科書で見た「デス・マス体ベース」のほうで圧倒的に現れたのではなく、「ダ体ベース」のほうでも「デス・マス体ベース」のほうでも各 5 割ほど観察されている。学習段階が中級、さらに上級へと進んでいくと、学習項目が多く、難しくなるため、「ダ体ベース」の会話も多くなることによる当然の結果であろう[20]。

ここでは、1 個しか観察されていない「(3) 形式的には「ダ体」だが、音声的に「ダ体」と認められない発話」(例 11)、それから「会話の基本レベル」、及び表現形式の使用コンテストという点から興味深い現象が見られる「②条件形表現：たら」(例 13～15) と「⑦副

[19] こうした「⑤トピック提示表現：は」という「中途終了型発話」は、陳 (2004b：160) では「直接的な質問の回避」という生起要因で使用されると述べている。回避の理由は、「～は」という「中途終了型発話」の多くが個人情報または真偽を問う疑問文であり、失礼にならないために、その続き (の真偽) を相手に (判断して) 言ってもらったほうがよいとしている。詳しくは陳 (2004b：160-165) を参照されたい。

[20] 中上級と分類した 11 冊の教科書を調べたところ、『大家的日本語』というシリーズの「進階ⅠⅡ」の 2 冊を除き、ほかではすべて「ダ体ベース」で現れた「中途終了型発話」が観察された。

詞表現」の「ちょっと」（例 16～19）について見てみたい。

表 5　中上級教科書における「中途終了型発話」

表現形式	出現数・割合				
	ダ体ベース		デス・マス体ベース		計
(1)複文の主節が省略されている発話					
①テ形表現：動詞 1（て形）	18	46.2%	21	53.8%	39
動詞2（ても）	3	100.0%	—	—	3
判定詞	3	50.0%	3	50.0%	6
イ形容詞	3	42.9%	4	57.1%	7
②条件形表現：と	3	100.0%	—	—	3
ば	1	100.0%	—	—	1
たら	11	91.7%	1	8.3%	12
なきゃ	3	100.0%	—	—	3
なくちゃ	5	71.4%	2	28.6%	7
③接続助詞表現：ので	—	—	9	100.0%	9
んで	—	—	9	100.0%	9
のに	9	90.0%	1	10.0%	10
くせに	1	100.0%	—	—	1
(2)述部が省略されている発話					
④引用表現：と	—	—	1	100.0%	1
って	5	100.0%	—	—	5
⑤トピック提示表現：は	13	48.1%	14	51.9%	27
って	3	100.0%	—	—	3
も	2	100.0%	—	—	2
⑥例示表現：とか	1	16.7%	5	83.3%	6
たり	1	100.0%	—	—	1
⑦副詞表現（レパートリーが多く、特定しがたい）	9	60.0%	6	40.0%	15
⑧名詞修飾表現：（名詞）の	3	50.0%	3	50.0%	6
⑨名詞（句）＋格助詞表現：が	5	83.3%	1	16.7%	6
で	1	25.0%	3	75.0%	4
に	—	—	2	100.0%	2
にも	—	—	1	100.0%	1
も	—	—	1	100.0%	1
を	1	100.0%	—	—	1
⑩その他（上記のどれにもあてはまらないもの）	10	29.4%	24	70.6%	34
(3)形式的には「ダ体」だが、音声的に「ダ体」と認められない発話	—	—	1	100.0%	1
計	114	50.4%	112	49.6%	226

まず、1 個しか現れていない「(3) 形式的には「ダ体」だが、音声的に「ダ体」と認められない発話」を例 11 に示す。こうした発話は本稿が使用した資料ではこの例 11 の 1 個しか見られなかった。

例 11（『現代日本語コース 中級 I 』第 9 課より）（＝注 8 の例 A）

先生:学会に間に合うようにコピーしといてくれないかな。

ルイン：はい。

→　　何部ぐらい…。

先生：うーん、１００部もあればいいと思うけど。

こうした発話は「(1) 複文の主節が省略されている発話」とも、「(2) 述部が省略されている発話」とも違い、音声的に言い切っていないと判断したものである。つまり、注 8 でも説明したように、こうした発話の末尾が平板のイントネーションを伴い、伸ばしてゆっくり話されている。仮に例 11 における「何部ぐらい」を音声的に言い切ってしまうとすると、末尾が上がって「ダ体発話」になり、例 11 のような先生を相手に会話している場合、失礼になってしまう。よって、前節の例 10 の「⑤トピック提示表現：は」と同様に、失礼にならないような音調が指導の留意点である。

しかしながら、こうした発話は本稿の資料では 1 個しか見られず、その出現割合は僅か 0.4%（1/261）で、殆ど教科書に現れてこない。従って、教室においてはほかの会話例を使い、発話の末尾を平板のイントネーションを伴い、伸ばしてゆっくり話すように指導の工夫が必要であろう。例えば、次の例 12 における→付きの発話を「こちらは奥さん…」のように、末尾を平板のイントネーションを伴い、伸ばしてゆっくり話すように指導することができる[21]。この例 12 は『新實用日本語 會話 I 』の第 2 課、つまり日本語を勉強して間もない時に学習者が触れるものである。中級になってから、既習の例を振り返らせて、練習させれば理解に苦しむことはないであろう。

例 12（『新實用日本語 會話 I 』第 2 課より）

山本：ああ、台湾貿易の王さんですか。初めまして。
　　山本です。どうぞよろしく。
王：こちらこそ、どうぞよろしく。
→　　こちらは奥さんですか。
山本：はい、家内です。
山本の奥さん：初めまして。どうぞよろしくお願いします。

[21] むろん、「⑤トピック提示表現：は」を使って、「こちらは…」と発話する指導もできる。ただし、この場合、その次に来る発話の工夫も必要である。

次に、興味深い現象が見られた「②条件形表現：たら」、及び「⑦副詞表現」の「ちょっと」についても例を挙げながら見ていく。

「②条件形表現：たら」は表 5 に示したように、「ダ体ベース」では 11 個、「デス・マス体ベース」では 1 個観察されている。ただし、表 4 の初級では全く見られていない。つまり、この「②条件形表現：たら」は、中級の学習項目と言える。「ダ体ベース」で使用されている 11 個は、『現代日本語 綜合講座』、『現代日本語コース 中級Ⅱ』、『日本語生中継 初中級編 1』、『日本語生中継 中～上級編』、『日本四季入門』、『搶救日語-聽解篇』の 6 冊である。その使用されているコンテクストを調べたところ、1 個は例 13 のような「前の文と後の文を時間的な順序でつなぐ」（グループ・ジャマシイ編著 1998：163-164）[22]、ほかの 10 個はいずれも例 14 のような「勧め」（白川 1995）[23]という機能をなしている、ということが判明した。

例 13（『現代日本語 綜合講座』第 15 課より）

夫：このあいだ、電話をとって彼女にわたそうとしたら、受話器をふいてからにぎるんだ。

妻：いやね。

夫：ちょっと頭にきたから、ぼくの手、そんなによごれていないよって言ってやったんだ。

→ 妻：そうしたら？

夫：細菌は目には見えないものです、だって。

例 14（『日本四季入門』第 5 課より）

男：あの、もっと近いところがいいんですが、どこか

[22] ただし、グループ・ジャマシイ編著（1998：163-164）の例では、すべて同じ話者にある発話となっている。本稿の例 13 のような例は、話し相手が「そうしたら？」を上昇イントネーションで発話し、元の話者に続きを言いやすくするという合の手のようなものだと考えてよいであろう。

[23] 白川（1995：34-35）では、「たら」で言い終わっている文の多くは「勧め」を表すが、「①タラ節の主語が聞き手であり、かつ、②タラ節の述語が意志的動作であることが必要」と指摘している。本稿で観察された例 14 のような例（10 個）はすべて白川の指摘と一致している。

ありませんか。

女:じゃあ、長野の高原でゴルフかテニスをするのはどう？
山菜もおいしいし。

男：スポーツはちょっと……。それより何か日本でしか
できないことはありませんか。

女：そうねえ……。

→ じゃあ、近所でパチンコでもしていたら？

男：パチンコはいつでもできますよ。

一方、「デス・マス体ベース」で現れたのは例 15 の 1 個のみである。

例 15（『現代日本語コース 中級 I 』第 9 課より）

ルイン：いえ。先生、学会の準備、大変そうですね。

先生：うん。ゆうべやっと原稿ができあがってね。

→ ルイン：そうですか。何かお手伝いできることが
ありましたら……。

先生：そうだね。じゃ、わるいけど、レジメをね。

例 15 にある「②条件形表現：たら」は、上の例 13 と例 14 の使用コンテクストとは異なり、「目上の人に申し出るもの」である[24]。しかも、「デス・マス体ベース」に現れるだけでなく、「～ありましたら」のように「デス・マス体発話」のような形をしている。それは、相手が先生であるため、表現形式にもっと気を配らなければならないからであろう。

上述したことから、「会話の基本レベル」が「デス・マス体発話」か「ダ体発話」かによって、使用しやすいまたは使用しにくい「中途終了型発話」があると言ってよいであろう。さらに、使用コンテクストによって機能が違ってくる表現形式があるため、「会話の基本

[24] 次節の五、（四）節の例 21 も参照。「目上の人に申し出るもの」という用語は『現代日本語コース 中級 I 』に従っている。

レベル」のみならず、相手との上下関係への注意も必要である。

表現形式の使用コンテクストによる機能の違いに関しては、「⑦副詞表現」の「ちょっと」も見てみたい。

「⑦副詞表現」は、初級と合わせてみると、計 18 個観察された。そのうち、「ちょっと」が 9 個で、半分ぐらいを占めている[25]。岡本・斎藤（2004）に従い、「ちょっと」の使用コンテストを見てみたところ、その機能として次の例 16 の「断りを受けやすくする」、例 17 の「否定的内容の前置き」、例 18 の「呼びかけ」、例 19 の「その他」が観察された[26]。

例 16（『大家的日本語 初級 I 』第 9 課より）

ミラー：来週の金曜日の晩です。

木村：金曜日ですか。

→ 金曜日の晩はちょっと……。

ミラー：だめですか。

例 17（『日本四季入門』第 5 課より）

女：じゃあ、長野の高原でゴルフかテニスをするのはどう？山菜もおいしいし。

→ 男：スポーツはちょっと……。それより何か日本でしかできないことはありませんか。

例 18（『現代日本語コース 中級 I 』第 2 課より）

→ 先生：あ、アリスさん、ちょっと。

アリス：はい。あのう、何か……。

[25] 初級の『げんき I 』（第 3 課）と『大家的日本語 初級 I 』（第 9 課）では 1 つずつ見られた。比較的早い段階で出現していると言える。

[26] 岡本・斎藤（2004）は「ちょっと」の機能として、①依頼や、希求、指示行為の負担をやわらげる、②否定的内容の前置き、③断りを受けやすくする、④呼びかけ、⑤とがめ、⑥間つなぎ、の 6 つを挙げている。本稿の分析対象のモデル会話では、そのうちの②③④しか見られなかった。なお、岡本・斎藤で触れられていないものを「その他」とした。

例 19（『毎日聴力 50 初級Ⅱ』第 40 課より）

女：リーさん、その足、どうしたんですか。

→ 男：ええ、たいしたことないんですが、交通事故で、

ちょっと……。

女:えっ？交通事故？

このように、コンテストによって機能が異なる表現があるため、特に様々な学習項目をこれからも多く身に付けようとする中上級学習者に教える際は注意する必要がある。

五、（四）、教科書における「中途終了型発話」の説明・練習

先行研究でも指摘されているように、教科書にはある表現やその機能、または文法項目に関する練習や説明が極めて少ない。本稿で調査した教科書も例外ではない。そうした練習や説明がある教科書は『げんきⅠⅡ』、『現代日本語 綜合講座』、『現代日本語コース 中級ⅠⅡ』の 3 シリーズで 5 冊のみである。しかし、「中途終了型発話」そのものに関しては、非常に少ない。以下に「中途終了型発話」に類した説明と練習を 1 つずつ紹介する。

まず、例 20 は『現代日本語コース 中級Ⅱ』における「ちょっと」の説明である。例 20 では、「ちょっと」の意味について説明した上で、その後に来そうな「都合がわるいんです」や「行けないんです」が省略されると解説されている。それから、「ちょっと」に代わって、「どうも」の使用もでき、さらに「あしたは……」を躊躇したような音調で発話するのも同じ効果になると説明している。このような、省略される表現、ほかの表現や音調までの言及がある説明は、ほかの教科書に見られない、斬新な手法と言えよう。しかし、こうした説明は、残念ながらこのシリーズの教科書にもさほど多くない。

例 20（『現代日本語コース 中級Ⅱ』pp.122-123 より）

（例）A：あした，いっしょに泳ぎにいきませんか。

Ｂ：あしたはちょっと……。

Ａ：ああ，そうですか。

Ｂ：ええ。

Ａ：じゃあ，またいつか。

Ｂ：ええ。すみません。

The sentence of “あしたはちょっと……”literally means “Tomorrow is a little bit ……,” but actually conveys the meaning that tomorrow is inconvenient for B. So “都合がわるいんです”or “行けないんです” is left out.

「ちょっと」

“ちょっと”is used to weaken the tone of disapproval. In other words it shows A’s reluctance to trouble B so that the sentence sounds more reserved and considerate. “どうも（lit. somehow）”also implies a negative statement and can be used with the rest of the sentence committed. It, however, the speaker says “あしたは……”by using a hesitant, dangling tone, he can convey the same implication without even using such words as “ちょっと and どうも.”

前節で述べたように、「ちょっと」は「⑦副詞表現」の中で最も多く現れているものである。例 20 にある説明は最も典型的な機能（断りを受けやすくする）をなすものとは言えるが、ほかの機能（呼びかけ等）もあるため、「ちょっと」の機能の総合的な学習ができるようになるには、指導する際、機能への注意を促す工夫が必要である。

次に、『現代日本語コース 中級Ⅰ』における練習を例 21 に示す。

例 21（『現代日本語コース 中級Ⅰ』p.246 より）

練　　習

１．用法練習

＜１＞「目上の人に申し出る場合」

会話の下線のある部分を,下の 1～5 の言い方にかえて練習しなさい。

何かお手伝いできることがありましたら…

[A…先生（男性）　B…学生]

A：さあ，これから，もうひとがんばりだなあ。

B:あのう,何かお手伝いできることがありましたら……。

A：そうだね，じゃ，お願いしようかな。

B：はい。

1.私にできることがありましたら……。

2.何でもおっしゃってくだされば……。

3.何かお役に立つことがありましたら……。

4.タイプするものがあればいたしますが……。

5.コンピュータに入れるものがあれば入れますが……。

例 21 における練習対象の（「B：はい。」の下の）1.～3.は、本稿の「中途終了型発話」の「②条件表現：たら、ば」にあたる練習と言えよう。この表現形式は「目上の人に申し出る場合」に使える用法だと書いてあるものの、学習者として持ちそうな疑問、なぜこういった表現を用いるのか、その効果は何か、ほかに応用できる場面がないのか、といったことに対する説明は見当らない。この例 21 のような､「中途終了型発話」に類した練習は､『現代日本語コース 中級ⅠⅡ』ではすべての課ではないが、よく見られる。しかし、いずれも練習のみで、説明は現場の教師任せということになっている。

繰り返しになるが、教科書にはある表現または文法項目に関しては、文または会話の提示のみのものが多く、説明は現場の教師に頼っている。このことは、上記の例 20 と例 21 によって改めて確認できたと思われる。よって、本稿のような教科書分析研究を通して、ある表現または文法項目を指導する際の留意点をより明確に把握することができる。

六、まとめ

本稿では、教科書のモデル会話における「中途終了型発話」の使用状況を種類別（総合、聴解、会話教科書)、レベル別（初級、中上級）に調査した。その結果、次の 3 点が明らかになった。

Ⅰ.全体的の平均出現率は 40.1%であった。

Ⅱ.種類別では、聴解教科書の 48.0%＞総合教科書の 35.3%＞会話教科書の 30.2%のように、差は見られたものの、教科書によって出現割合が大きく異なる。

Ⅲ.レベル別の出現傾向に関しては、次の 3 点が言える。

①初級教科書には 35 個の 13.4%であるのに対し、中上級教科書には 226 個の 86.6%観察された。

②表現形式で見ると、初級教科書で観察された表現形式は少なく、しかもその多くが「(2) 述部が省略されている発話」に集中している。しかし、中上級教科書に現れた表現形式は多岐にわたり、「(1) 複文の主節が省略されている発話」にも「(2)述部が省略されている発話」にも各 5 割ほど見られた。

③「会話の基本レベル」別に調べると、初級教科書では「デス・マス体ベース」のほうに 82.9%と圧倒的に現れたが、中上級教科書では「ダ体ベース」、「デス・マス体ベース」共にほぼ均等に観察された。ところが、「ダ体ベース」に現れやすいものがあった（②条件形表現：たら)。

そして、先行研究で指摘されている「ある表現やその機能等に関する説明や練習が少ない」ことは、本稿で資料として用いた教科書でも確認した。「中途終了型発話」の出現割合は教科書によって差が大きいものの、学習者は「会話」の授業も「聴解」の授業も受けるので、「中途終了型発話」に触れることは決して少ないとは言えない。よって、上記の結果等を基に、教師が「中途終了型発話」を指導する際、次の 3 項目への注意・工夫が必要だと指摘した。

（A）失礼にならないような音調（初級から）

（B)「会話の基本レベル」による使用傾向（中級以降）

（C）使用コンテクストによる機能の違い（特に中級より）

一方、本稿が資料としたモデル会話から新たにいくつかの表現形式を追加した。「中途終了型発話」の全体像を把握するため、今後様々な会話を収集し、さらなる検討が必要である。

（付記）本稿は、「靜宜大學 95 學年度鼓勵專任教師專題研究」という研究補助を受けて行った研究に加筆・修正を施したものである。なお、匿名の査読者の先生方から大変有益なコメントをいただきました。ここにて記して心より厚く御礼を申し上げます。

引用文献

生駒知子・志村明彦（1993）「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』79 号　日本語教育学会　pp.41-49

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用―スピーチレベルシフト生起の条件と機能―」『学苑』662 号　昭和女子大学近代文学研究所　pp.27-42

――――――（2001）「談話のポライトネス―ポライトネスの談話理論構想―」『談話のポライトネス』凡人社　pp.9-58

岡本佐智子・斎藤シゲミ（2004）「日本語副詞「ちょっと」における多義性と機能」『北海道文教大学論集』第五号　北海道文教大学　pp.65-76

カノックワン・ラオハブラナキット（1995）「日本語における「断り」―日本語教科書と実際の会話との比較―」『日本語教育』87 号　日本語教育学会　pp.25-39

グループ・ジャマシイ編著（1998）『教師と学習者のための日本語文系辞典』くろしお出版

白川博之（1995）「タラ形・レバ形で言いさす文」『広島大学日本語教育学科紀要』5　広島大学教育学部日本語教育学科　pp.33-41

杉山ますよ（2001）「対談番組にみられる「中途終了型発話」　表現形式、生起理由、会話のストラテジー」『別科論集』第 3 号　大東文化大学別科日本語研修課程　pp.35-53

清ルミ（2003）「「つまらないものですが」考―実態調査と日本語教科書との比較から―」『異文化コミュニケーション研究』第 15 号　神田外語大学異文化コミュニケーション研究所　pp.17-39

谷口まや（2004）「日本語教材におけるスピーチ・レベル・シフトの取扱いについて」『AJALT 日本語研究誌』国際日本語普及協会　pp.35-51

陳文敏（2000）「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話―表現形式及びその生起の理由―」『言葉と文化』創刊号　名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻　pp.125-141

―――（2004a）「台湾人上級日本語学習者の初対面接触会話におけるスピーチレベル･シフト―日本語母語話者同士による会話との比較―」『日本語教育論集』20 号　国立国語研究所　pp.18-33

―――（2004b）『同年代の初対面同士の会話に見られるスピーチレベル・シフト―日本語母語話者と台湾人上級日本語学習者の比較―』名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版』くろしお出版

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

宮田 Susanne（2004）『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』ひつじ書房